

【原文編】

五 『宇田友四郎翁』より

土佐中學校の設立

一 その出発点

富を利用することの難きは、富を獲得することの難きよりも難し矣。白洋汽船によつて、數百萬圓の巨富を致した宇田翁は、その富を如何に利用すべきかに就いて、いろ／＼考へたであろう事を推察する、その中に於て翁の腦底に、學校設立の胚芽があつたか什麼うか。横山又吉氏が市商を隱退した時、同氏を校長とする簡易商業學校設立の意思が、動いてゐたといふ事が事實とするならば、後進子弟の教育には、決して無關心でなかつたといふ斷定を生む譯だが、無から有は生じないから、商業教育の胚芽が、他の勸説を受けて、英才教育の嫩葉わかばに變じたとの觀測は、當らずと雖も、遠からずではないかとも思はれる。白洋汽船で大いに儲かつたのは、翁一人でなく、川崎幾三郎氏いくさぶろう並に他の株主は、皆な富屋を潤した連中である。この黄金風景を眺めて、その富の一部を世の爲に割愛したいと思案したのが、名市長藤崎朋之氏であつた。翁と藤崎氏とは爾汝じよの間柄で、平素翁の「財」に対する觀念を能く理解せる氏は、「富んで之れを樂

しく使用せざる人は猶ほ黄金を運ぶ驢馬の藪を食ふが

如し」との金言を親友の爲めに活かしたいと考え、或日助役

川島正件氏にその話をした。話の要點は、この際翁と川崎氏と

に金を出さしておきたいと云ふのであり、それが發端となつて、

川島氏及び視學西山庸平、市會議員池本浩靜三氏が、市長の意

思を體しての會合となつた。三氏は孰れも教育に一家の見識

を備へた人物であり、その意見が期せずして、合致するものゝ

ある事を藤崎氏は知つてゐた。そして宇田翁が君子三樂の一たる「心に恥づる所無き」人物たることは、夙にその認む

るところであると同時に、天下の英才を得て之れを養成するの樂しみも、話せば解かる人たることを頭に置いてゐたも

のだから右の三人會は屢々相集り、屢々協議を重ねた結果、英才教育のために資金を出さするのが、最も有意義だとの

結論に到達したので、早速この三人會において豫算私案を作り第一案百萬圓、第二案八十萬圓、第三案六十萬圓と三通

りの膳立が出来た。これが抑も土佐中學校創立の發端である。



藤崎朋之氏

二 翁が生みの親

三人會で、三段構への豫算が出来たとは云へ、未だ肝腎の本人には會つてゐない。蓋し三人會の腹案は、先づ三人が手を携えて宇田翁に會ひ、打診の結果、有望の見込が附いたならば、之れを在京の先輩北川信從氏のぶよりに持ち込み、同氏より翁に切り出してもらふ段取りであつた。北川氏は司法官畑の人で、長崎地方裁判所検事正を辭めると、直ぐ長崎市長に選ばれて就職、後ち栃木、新潟の知事に任せられ、官界を退いてからは、東京芝區三田小山町に悠々閑日月を樂しんでゐた。北川氏と翁との交際は随分ふるく、大阪、廣島あたりの司法官時代から、ずつと相識つてゐた本統の友人關係で「北川！宇田！」と互に呼び切りにする親しさであつた。そして北川氏と藤崎氏とは極めて如才の無い肝膽相照、至誠相許す間柄であつた。此の如き好縁の蔓つるを握つてをる發起人組は、一日相伴ふて金的を射とめるべく宇田翁を訪ひ「非常な御成功の御様子に承はりまするが、何か一つ縣のために金を出されては如何ですか」との伏線網を敷いたところ、翁は言下に、そして快濶かいつに「出してもよい」と共感の意思を表明し、一行を満足せしめたのであつた。是に於て三發起人は、高根の花に手の届いたやうな歡びに浸りつゝ、早速豫定のコースを踏んで、在京の北川氏へそれを持ち込んだ。アマノジャコを床の置物にする北川氏は、容易に他人の言をその儘受け納るゝ人でない、三人から數回手紙を出しても、それが物になるかと云つた調子で、中々御輿を上げやうとせぬ。いよ／＼アマノジャコぞと云ふので、三人は必死とな

り、この通り手形を取つてをるからとて、最後の手紙を示し、やつと來縣してもらひ北川氏と發起人側と第一回の會見が公園花月亭に於て行はれた。その時發起人側の第一印象は、うかと百萬圓だの、八十萬圓だのと言つたら、その場でアマノジャコの本領をむき出して逆襲せらるゝ危機を豫感したので、豫算額を最小限度の六十萬圓として北川氏に持出した。その程度なら應ぜぬことはあるまいとて、北川氏から更に宇田翁に持出した。翁は藤崎市長の見抜いた通り、人材養成には双手を擧げて賛成した。然かもその賛成が、我が意を得たりと云ふ喜色満面の賛成振りで、翁一人で百萬圓でも投げ出し兼ねまじき勢いであつた。けれども謙虚にして、義理と人情とに重きを置く翁は、事業を共にし、儲かりを共にしてをる盟友川崎氏の身の上をも考へた。そして子孫の無い川崎氏はこの教育事業へ金を出しておくことが、自己を永遠に生かす所以ゆゑんとなる、だから宇田一人の事業とせず、二人共同の事業にすると云ふ趣旨を以て、川崎氏を同意せしめたものと思はれる。川崎氏を誘ふたのは、寄附行爲を折半と云ふやうな思惑からでは決してなかつた。實際その時の翁の共鳴振りは、素晴らしいもので、百萬圓眼中に無しの概おもむきがあつた。だから北川氏が乗り込んで、二三時間の間に話はスラ／＼と進行し、「川崎、宇田財團法人寄附行爲」の決定となり、大正九年二月を以て許可された。この経過の證明する如く、藤崎名市長の發意あり、北川信從氏の斡旋ありと雖も、相手方が宇田翁でなかつたならば、この事業は斷じて成立しない筈のものだ。事實は最善の雄辯である。土佐中學校の生みの親が、翁であることは多言を要しない。

三 所謂人材教育

土佐中學校は、國家有爲の人材を養成することが其の目的で、設立趣意書に

本校は大戦後國運の進展に伴ふ中等學校内容充實の趣旨に依り設立せられたるものにして中學校令の示す所に據り、中堅國民の養成を目的とするは論を俟たざれども亦た一面高等教育を受くるに十分なる基礎教育に力を致し修業後は進んで上級學校に向ひ他日國家の翹望する人士の輩出を期するものなり

とある通り、縣下の秀才を一堂に集めて「高等教育を受くるに十分なる基礎教育に力を致す事」と「國家の翹望する人士の輩出を期する事」の二つが其の最大眼目となつてをる譯で、此處に他の中等學校と大に趣を異にする、特色を有つてをることを知らねばならぬ。同校の「沿革概要」中に

故川崎幾三郎及び宇田友四郎の兩氏は、夙に縣下の爲に私財を投じて公共的事業を經營せんとするの意あり、大正七、八年の交、豫て昵懇なる北川信從氏に、その事案の選擇を委囑せり、爾來北川氏は審思熟慮、永久に且つ普遍的に兩氏の素志を貫徹するは、教育事業に如くはなしと斷じ、之れを兩氏に通ぜしが、兩氏亦た大に之れを賛し、その資金六十萬圓を提供し、十萬圓を設備費とし五十萬圓を基本金とする財團法人として之れを管理し、豫科を附設する中學校を設立することを協定せり。

如上の記事は、土佐中の特色と、その沿革とを一層明白ならしめてをる。

四 校長の人選

土佐中學校の母體が宇田翁であり、その産婆役が翁の親友北川信從氏である關係に於て校長の選擇は當然北川氏の裁量に一任すべき筋合となつて来た。發起人の川島正件、池本浩靜兩氏は、英才教育の主張者たる同志西山庸平氏を、校長たらしめたい意見を持つてゐた。然るに北川氏は、中學校の教育に經驗の無い西山氏では、何んだか物足りないからと云ふので、新潟縣立中學校長三根圓次郎氏に、白羽の矢を立て、宇田翁の同意を求め、同氏を招聘することに決定した。

蓋し北川氏は新潟縣知事時代に、三根氏の人物、識見、手腕を熟知してゐた爲であらう。斯くて三根氏は大正九年二月八日、土佐中學校の校長として着任し、翁に自己の抱負を陳べた。

人を見るの明ある翁は、この良校長を得て、すっかり安心し流石北川の推薦だ、萬事委ねることが出来ると歡んだ。そして帶屋町にある川崎氏の控家を假校舎に充て、同年四月十

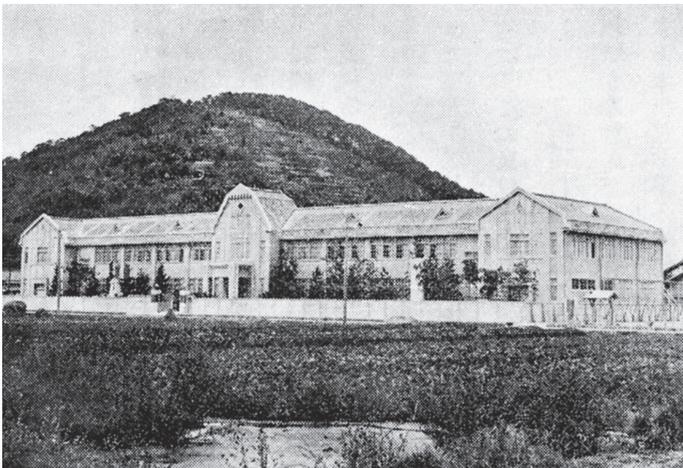


三根圓次郎氏

六日、翁及び川崎氏等列席の上、本科入學式を舉行して、生徒二十八名に入學を許可し、直に授業を開始したのである。翌五月六日豫科入學式を舉行し、第一學年十名、第二學年十五名に入學を許可して豫科の授業を開始した。これが實は開校當初の状態で、英才教育に熱意を有する翁の面上には、人目にも判る程の嬉し味と、緊張味が溢れてゐた。

五 創立時の熱意

土佐財界の兩巨頭が、私財を投じて中學校を起したことは、全縣下の精神界に非常なる好印象を與へた。就中一市七郡の教育者は心からの感興を寄せた。この際宇田翁は他事を放擲して、學校敷地の調査中であつたが、最初江ノ口に候補地を物色したかなれど、都合により潮江に變更し、大正九年十月同地に確定し、敷地五千二百七十七坪餘の購入を了し、大正十年二月十五日、埋立工事開始の爲め、地鎮祭を行ひ、翌十六日より起工、同年八月新築工事に着手したのであるが、翁は最も熱心に創立の仕事に携はり、敷地の選定、購入をはじ



土佐中學校の全景

め、建築の様式及びその請負に至るまで、翁が中心となつてグン／＼進捗せしめた。そして建築中も、益々熱心に諸工事を監督し、他の理事をして、その眞剣味に舌を捲かした程であつた。

六 捌けた出資者

翁の天性か、將た修養自得の結果か、その執れにもせよ、翁が當事者に全幅の信頼を拂ひ自由を與へるその誠心、その度量は、土佐中學校の場合にも美はしく發露されてゐる。事業の草創時代には細大悉く之れを一身に引き受けて、寧ろ行き過ぎる程の世話を焼いた翁は、事業の緒に着くと共に、一切を當事者に任せ切り、何事にも徹底した不干渉主義を執つた。だから三根校長としても、思ふまゝに自己の意見を行ふことが出来、従つて學校の成績が大に擧つたのである。他と對照すると此の點が能く分るが、竹内明太郎氏が私財を提供して工業學校を經營するや、必要に應じて、その都度金を出すと云ふ方法を執つたものだから、校長などは窮屈を感じ、不便を感じた。其處になると、宇田翁の遣り口は全然別で、金は全額を出しつ放し、經費は當事者の決定に一任と云ふ、伸縮自在の餘地を與へて、單だその成績に留目したまでだ。出資者が斯く捌け、斯く碎けてゐるから、剛直不屈の三根校長も感激して、全魂を打ち込む努力を拂つたのである。

七 川崎氏の銅像

大正十年十一月九日、北川信從氏來校、生徒の爲め有益なる講話を爲し、職員生徒一同と記念撮影をしたその翌日、川崎幾三郎氏が腦溢血で逝去された。そこで宇田翁は北川氏等と相計り、豫て當時の土佐銀行關係者によりて、釀^{きよ}金し建設せんとした川崎氏の銅像を、土佐中學校の構内に建設することにした。こゝにも翁の川崎氏に對する美德が窺^{うかが}はれてをる。



川崎幾三郎氏の銅像

八 學校の財政

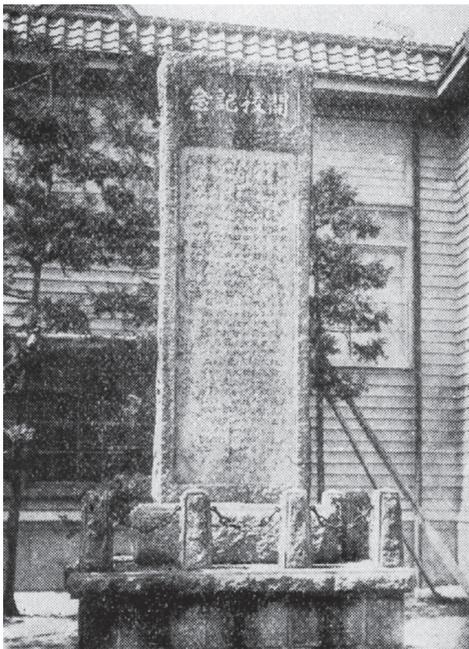
是より前、潮江校舎の新築工事に着手するや、豫定の工事費では不足を來すこととなり、翁と川崎氏が各々五萬圓づゝを出した。これで兩氏の出資額は七十萬圓となつた。そして川崎氏が逝去せられた時、その香奠料が十三萬圓あつたから、翁は遺族川崎松子並に川崎庄五郎氏に奨め、香奠料へ更に二萬圓を加へ、都合十五萬圓を出資せしめた。仍^{なほ}つて總資金八十五萬圓に達したのであるが、内二十五萬圓の土地代、建築費を控除した正金六十萬圓が、基本資金となつた譯だ。そこで翁はその六十萬圓を、翁の關係してをる高陽銀行に於て、特に七朱五厘の利率で預ることにした。土佐中

學校の經常費は年額三萬圓以上を要する計算となつてゐるが、翁の計らひで四萬五千圓の利子が生れる膳立となつたから、三根校長をはじめ、學校當事者は益々翁の志に感激した。そして高陽銀行が四國銀行に合併してから後も、特に七朱の利子で預つてくれたから、學校の財政は相變らず裕福であつた。

九 五大方針の實行

潮江の新校舎で、授業を開始する運びとなつたのが大正十一年の陽春四月であつた。これは校舎新築第一期工事の落成した直後で、第二期工事は四月一日に着手され、十月末日には早くも完成された。川崎幾三郎氏の銅像除幕式は、翁の發議により、學校の全貌がすっかり出来上り、季節も恰度菊花満開の十一月十九日を以て、いとも莊嚴に舉行され、斯くて開校記念碑の建設を見たのが、大正十二年であつた。是に於て全國中等教育界の視聽を聳えしめた土佐中學校の内容外觀は、翁の用意と努力によつて一切整備すると共に

一、個人指導に重きを置き、教授能率の増進を計ること



土佐中學開校記念碑

- 一、天賦の能力を發揮し、自發的修養に努めしむること
 - 一、堅忍剛毅の性格、健實なる思想を養成すること
 - 一、責任を重んじ、好んで勞に就く習慣を養ふこと
 - 一、運動を奨勵し、養護上の注意を怠らず、以て體位の向上を計ること
- の五大方針が着々實行され始めたのである

開校記念碑文

筆山の麓鏡川の畔校舎巍々として咿唔の聲雲に響く是土佐中學校に非ずや 教育振へば國家榮え教育振はざれば國家衰ふ 維新の際薩長土と並稱せられて土佐より人材多く輩出したりしは文に武に父兄の教育氣分盛にして子弟の向上心盛なりしに因らずんばあらず 爾來教育振はず人材漸く凋落せむとす 川崎幾三郎宇田友四郎二氏大に慨する所あり巨財を投じて土佐中學校を創立大正九年四月より假校舎にて授業を始め大正十一年十一月十八日本校舎の落成式を擧ぐ 茲に在校生の父兄相圖り碑を建て、二氏の功を傳へむとす 善い哉擧や 父兄既に恩を知る 子弟亦恩を知らざらむや 體を鍛へ心を鍊り徳器を高くし智能を大にして國家に盡すは二氏の恩に報ずる也 二氏の恩に報ずるは君國の恩に報ずる也

大正十二年一月

大町桂月撰
松村翠濤書

一〇 北川理事長の訃

大正十三年四月二十七日、理事長北川信從氏が逝去された。病名は胃癌であり、翁の別邸に於て逝去された。北川氏と土佐中學校との關係は、理事長の役目そのものが一切を説明してをる。同三十日全校悼惜して靈柩を送つた。同氏は東京に在りて病を得、大正十二年十一月下旬、高知に於て靜養すべく歸省した。友情に厚き翁は、心配しつゝ棧橋に出迎えたが、蒼白の顔色に、いたゞしき寒れを見せて、船橋を降るにも危氣を感じたので、翁は寄り添ふて手を貸さうとすると「有りがたう、それには及ばぬ」とニツコリ笑つた。そして一先づ親戚の家に落ちつき、適當な貸家を物色したが容易に見つからぬ。この事を傳へ聞いた翁は「俺の別邸でよければ何時でも用立てる、遠慮はいらぬ」と、度々親切な言葉を寄せたので、北川氏は深くその友情を感謝し、間もなく此處に移り、何んの氣兼ねもなく寛いで、悠々療養につとめる事が出來た。這の間に於ける翁の心盡しは、好個の教育道話であり遠がに私財を投じて一個の中學校を建てた人だけあると、出入りの親族や昵懇者間の話題となつた。北川氏も餘程その好意を感銘したものと見え、遺命して家寶の岸駒と、大雅堂との六曲一双の屏風を翁に贈つたのであつた。

一一 北川氏と翁

「友を見て其の人を識る」と云ふ聖人の言がある。宇田翁の至誠相許した友は

近森虎治、藤崎朋之、北川信従、田岡典章の四氏

で、孰れも人格高潔、一識見を具へた非凡人たる點に於て一致してをり、亦た四氏共に申し合せたやうに、名利に淡泊な人達である。こゝに偶々翁の眞骨頭が浮き彫りにせられてゐるのではなからうか。左に翁の北川信従氏に對する追悼の辭を掲げる。

北川と呼び切りにするのが、土佐流で親しみ深くもあるやうだ。北川とは随分久しい交際で、大阪廣島あたりの司法官時代から、ずっと相識つて居るのだが、多くは縣外での交際であり、土佐に歸つて居た前後二三回の期間は引つくるめても甚だ短かい。

長らくやつてゐた長崎市長を辭めて高知へ歸り、本町に僑居してゐた頃には、死んだ藤崎（朋之）も元氣だつたし、我々みんな同年で、その頃は未だ大分飲めてゐたのである。所が晩年の北川は自分よりも早く酒と遠ざかり「一寸もいけぬ様になつた」と言つて、五六杯も傾けると、眞ッ赤な顔をするのが不思議でならなかつた。ところが自分も近年神経痛で醫師からは、酒は毒だと制せられ、一年も止めてをる間に、全く量がなくなり、北川よりも一層いけなくなつたのは可笑しい。

それは儲^{たく}て措き、北川と云ふ男は、若い頃から實に無慾恬淡な質で、一番金儲けでもして、豪奢な真似をして見やうなど云ふ心は微塵もなく、死ぬまで困らず、人の助力を借らぬ様にうまく暮して行けば、結構此の上なしと云ふ風で、洵^{まこと}に足る事を知る風の男であつた。

知事をやめて、東京三田小山町に頃合な邸宅を買入れ、死ぬ前の暮近くまで自適してゐたが、北川の事だから、要るだけの金はきれいに使つてしまつて、殆んどまとまつた貯蓄なんてものは無かつた事と思ふが、長崎市から贈られた慰勞金や、何かで買つたやうに聞いてゐる。當時物價が何分安かつたので、程なく好況時代に遭遇すると、其の邸宅も相當高く評價されるやうになつた。淡泊で胸中をさらけ出す北川は、

「これで俺も賣り食ひにしても、何うやら死ぬ頃までは食ひつなげさうぢやから安心した」など、戯れらしい、而して眞實の事を言つてゐたのである。そんな調子で、北川は正直、洒落、而して先輩知友いづれの前であらうと、己の思ふところを吐露して、恐れ憚る處がなかつたが、それが至つて公平なものだから、長崎や栃木、新潟などで評判のよろしかつたのも偶然ではない。



北川信從氏

長崎から歸つて、高知で遊んでゐた時分、丁度大隈内閣が出来た。知友が「北川お主も未だ遊んでゐるのは惜しい、何かやれ、知事なら何うちや」と勸説した時「外の事は、もう飽き／＼したが知事ならもう一度つとめに出ても悪くもない」と言つた調子で、大石正巳氏から大浦内相に談じ込み、いよ／＼起用されることになつたのだが、我々が是非高知へ連れて來やうと東京へ出向いて見ると「實は和歌山の方からも迎えが來てをる」と言ふ風で、引ツ張り凧、結局兩引となつて、栃木へ行く事になつたが、次いで新潟へ轉じ、前後三年餘りして勇退したのであつた。

丁度、大隈内閣の下に、知事となつたものだから、北川を憲政會系統の如く見る者が多分にあるが、北川は決して政黨人として動く男でなく、牧民官としても、實に公平無私で功績を擧げ、それでこそ素晴らしい人氣が寄つたのである。だから遊んでをるうち「代議士でもやつて見ては」と勧めるものがあつても「俺は黨人ぢやない」とテシから對手にならず、而して各政派の政策などに就いては、時々例の調子で、忌憚なき批評を下してゐた。

仙石氏など、最もよく北川の人物を理解してゐる人で「北川のやうな男は土佐にはない」と惚れ込んでゐた。友人であらうが、誰れであらうが「お前のやらうとしてゐる事は、あれはいかんよ」など、直言して憚からぬ所、我々は、大に徳として長く交際を續け、忠言により助けをかりたいと念じてゐたのに、天命はまことに是非もないことだ。而して、北川が一面非常に親切で、他界するまでに面倒を見てやり、世話をした人は随分多く、窮してゐる者を見て

は、有り無しの身錢を投げ出してまでも、救つてやつたりしたのだが、こゝには只追憶感想の一端を記すに止める。勿論右は、土佐中學校理事長としての北川氏を悼んだ言葉ではないけれども、こゝに掲げて不都合はあるまい。北川氏の靈にして知るあらば、知己の言として、かならず満足してゐるであらう。

一二 向陽會の生誕

大正十三年五月、上級生が主體となり、向陽會と稱する自治修養會が設けられ、その實踐躬行の決議事項中に

毎年一回、一同、創立者故川崎幾三郎氏の墓を弔ひ、報恩の念を堅めしむ

の一項がある。報恩は宇田翁の最も強調する實踐倫理で、翁は常に身を以てその範を示されてをる。一例を擧ぐれば川崎氏の永眠せらるゝや、翁は恭々して其の柩前にぬかづき、宛かも生ける川崎氏に對すると同様の、言語動作を以て、多年の恩義を謝し、併せて報恩の實を行爲の上に現はし、遺族達をして感激せしめたとの美談が傳へられた。翁は後進に封して、報恩を勸奨した。向陽會がこの美德の昂揚に力めたのは、全く翁の精神に副はんことを期しての事である。

一三 土佐中の誇り

土佐中は、英才教育を主眼とし、上級学校の豫備門たる観があるので、動もすれば世間から智育偏重の誤解を受け易かった。翁は體育の奨励者で

運動の際は裸體を奨励し、九月初め黒ン坊會にて其の等級を表彰す

といふ體育方針には大賛成であつた。この體育奨励の結果、土佐中は全國及縣下中學校に比し、身體検査の成績は斷然優秀で、身長、體重、胸圍揃つて抜群の數字を示してをり、これが斯の校の最も大なる誇となつた。

一四 徹底せる同情心

数多き美德中、思ひ遣りが深く、且つ周到なることが、偶々校長三根氏の清貧と關聯して、うらゝかな話題の種となつた。同校長が就任後四五年を経た頃だつた。或日翁から理事の川島氏に電話が掛り、會ひたいとの事だから、早速出向いたところ

聞けば、校長は大分借金が嵩み、利子だけでも相當要るらしい。餘程困つてをらるゝさうで、洵に氣の毒に思

ふ。學校の資金の中から融通し、薄利で始末方をする方が、校長もうるさうのうて可からうから、此の件を心配して貰ひたい

との話であつた。そこで川島理事が三根氏に就いて訊いたところ、借金の額は五千五百圓、それが皆な高利で難儀してをる事情が判明したから、氏は翁の意志を體し、資金の中から其の金を用立てた。昭和十年三月に三根校長が逝去せらるゝや、翁は見舞金として一万五千五百圓を贈呈し、遺族の者を感激せしめた。遺族は此の金の中から五千五百圓を學校の會計に返した。翁の周到なる用意と、その徹底せる同情振りが茲にも露はれてゐる。

一五 高遠の理想

三根校長の述懐に

北川信從氏は、學校創立の際、余に向つて曰ふ様「土佐は不思議にも、古來天才、奇才を出すこと少くないと思ふ、それで教育のしやうによつては、先人に劣らぬ偉人を輩出せしめる事が出来ると思ふから、しつかりやつて貰ひたい」との希望であつた。此の一言は余をして、責任の大なるを痛感せしめた云々

とある。この片言隻語に瞭かなる如く、土佐中學校の理想は、大人物を養成し、その活動によつて維新前後の華かなる

土佐に復活せしむると云ふのであつて、翁の高遠なる意見が亦たこの中に織り込まれてをる。であるから創業時代の土佐中は、確かに人材輩出の登龍門たる實を挙げ、上級學校入學の成績は文字通り百パーセントであつた。縣官民諸賢は翁の本縣教育上に印せる其の足跡と、その功績を仔細に検討し、翁の高遠なる理想を篤と認識すべきであらう。

昭和十四年九月三十日發行

著者兼發行人 高知市本町八十番地土佐電氣株式會社内

宇田翁傳記刊行會

代表者

下元 鹿之助

常務委員

川島 正件

下元 鹿之助